

特集 アクティブ・ラーニングの授業

アクティブ・ラーニングを可能にする プロジェクト型学習

興津紀子

(神戸大学附属中等教育学校)

1. はじめに

本校の生徒は、中高6年間を通してプレゼンテーション場面を想定した活動を行っている。学習した内容をもとに、その内容を絵・写真・グラフで示したり、新たにリサーチしたデータを使ったりして発表を行い、聞き手とその内容について意見交換を行う。中学1年生にも、scaffoldingの度合いを変えることで同様の活動を行うことは可能である。そのねらいは、5技能(4技能+「対話すること」)を総合的かつ統合的に学習することや、思考・判断・表現の機会を増やし、それらの力を高めることである。

2. プロジェクト型学習

プレゼンテーションをはじめとする表現活動を final outcome として、その過程で生徒の主体性を引き出し、意欲を高めることができる実践的な指導法として「プロジェクト型学習」がある。

以下に示した Stoller(1997)の ten-step process を参考に、プロジェクト型学習を実践している。

- 1) Agree on a theme (テーマの中で取り組む内容を考える段階)
- 2) Determine the final outcome (どのような発表形式にするのかを考える段階)
- 3) Structure the project (発表まで backward design をしていく段階)
- 4) Prepare students for the demands of information gathering (情報収集の方法〔例 インタビューの仕方〕等の必要なスキル・文法事項・語彙等を学ぶ段階)
- 5) Gather information (情報収集の段階)

6) Prepare students to compile and analyze data (さまざまな情報をまとめたり、分析したりする方法を学ぶ段階)

7) Compile and analyze information (情報をまとめる・分析する段階)

8) Prepare students for the language demands of the final activity (発表に必要なスキル・文法事項・語彙等を学ぶ段階)

9) Present final product (発表する段階)

10) Evaluate the project (自己・相互評価、教師のフィードバック等による振り返りの段階)

プロジェクトの過程で、ペアや4人組の小集団での活動を積極的に取り入れている。これらの学習形態を意図的に使うことで、関西大学今井裕之教授が研修会でおっしゃっていた「各々が考え、自らの役割を演じ、教え尋ねあうことで、他者の学びに貢献する」協働的な学習が実現できる。また、既習の文法事項や英語表現を繰り返し使用することで定着を図ることができるのがプロジェクトの醍醐味である。

3. プロジェクト型学習の実際

前任校では「外国の方に兵庫県のまちを紹介しよう」、「世界ユースサミットで世界の諸問題に対して解決策を提案しよう」等のさまざまなトピックでプロジェクト型学習を行ってきた。今回は本校の中学1年生を対象に実施した「海外の学校と e-mail を通した交流プロジェクト」を紹介する。

本校の教育目標である「グローバルキャリア育成」のため、基礎期(中学1・2年)に自己理解・他者理解をテーマとして掲げている。中学1年生では自己紹介・他者紹介ができることを目標に据え、

e-mail を通して海外の同年代の生徒とお互いに自己紹介を行い、交流相手のことを自分のクラスメートに紹介するプロジェクトを立ち上げた。

順不同ではあるが、先に提示した Step1 ~ 10 の要素を取り入れたプロジェクトの過程を以下に示す。

- ①生徒がペアを組み、アメリカの交流校から送られてきた相手生徒のリスト(「バスケットボールが好き」等、興味・関心が書かれているもの)から自分たちの興味・関心に合うパートナーを選ぶ。
- ②自己紹介を個人で考える。その後、交流相手をクラスメートに紹介するプレゼンテーションがあることを踏まえ、ペアで協力して、交流相手からほしい情報を質問にし、e-mail の文を完成させる。
- ③4人組の小集団のペア同士でお互いの e-mail を読み peer editing を行う。
- ④peer editing のアドバイスをもとにペア内で revise する。
- ⑤教師に提出。添削された原稿が返却されたら自分たちの写真を添付し、送信する。
- ⑥交流相手からの e-mail を読む。交流相手は英語母語話者であることから、送られてきた e-mail は personal かつ authentic で、未習の英語表現が含まれている。文脈から推測して読んだり、辞書を使ったりするなど、ペアと協力して読む。
- ⑦交流相手をクラスメートに紹介するプレゼンテーションに向けて、e-mail の内容を1人称から3人称に変えて原稿を書く。さらに交流相手の興味・関心・住んでいる街等に対して、説明を加えるためのリサーチを行う。
- ⑧プレゼンテーション練習。小集団内のペア同士でリハーサルを行い、peer evaluation を行う。そのアドバイスをもとに、本番に向けてプレゼンテーションを改善する。
- ⑨クラス内プレゼンテーション。内容に関する英語の質疑応答を行う。質疑応答に関して、中学1年生では難しいため、あらかじめ渡しておいた質問集を参考に質問ができるようにする。
- ⑩振り返りを行う。
上記の過程で、教師が行うべきことは以下である。
・生徒が見通しをもって計画的かつ自主的にタスクに取り組めるようにするため、プロジェクトの全

容と評価基準を最初に提示する。各レッスンのねらいも授業の最初に提示する。

- ・教師が前に立って説明する時間を減らし、生徒の活動時間を確保するため、簡潔でわかりやすい指示・良質のモデル提示を行う。
- ・各ペアの直面している課題に個別に対応するため、活動中には机間指導を行う。
- ・生徒が効率的に情報収集できるように、辞書準備や資料検索ができる学習環境の整備(例 タブレット端末の利用)を行う。テーマに即した vocabulary list を先に提示する場合もある。
- ・生徒がプロジェクトを行う意義、英語を使う目的を理解して活動できるように、プロジェクトの「設定」を提示する。先に紹介した前任校の取り組み「外国の方に兵庫県のまちを紹介しよう」では、自分の立場(兵庫県に住む生徒)、オーディエンス(日本を旅行している外国人)、目的(兵庫県のよさを外国の方にアピールする)を明示することで、生徒は目的意識をもって取り組むことができた。今回紹介した「海外の学校と e-mail を通した交流プロジェクト」は、海外に交流校がなくても、交流校があると想定して行い、ALT に e-mail を読んでもらうこともできる。自分の立場・オーディエンス・目的をはっきりとさせることで、プロジェクトは成立し、生徒の動機づけが可能になる。

4. おわりに

プロジェクト型学習の過程において、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」を促進することができる。生徒のより効果的な学びのために、教師が“the teacher as a guide”(Sheppard and Stoller, 1995)であることを自覚し、適切なフィードバックを与える等、生徒の活動をサポートし、よりよい方向に導いていくことが大切である。

【参考文献】
Sheppard, K., & Stoller, F.L. (1995). Guidelines for the integration of student projects in ESP classrooms. *English Teaching Forum* 33, 2, 10-15.
Stoller, F.L. (1997). Project work: A means to promote language and content. *English Teaching Forum* 35, 4, 2-9, 37.